

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 橋本 恭子

論文題目 『華麗島文学志』とその時代

——比較文学者島田謹二の台湾体験——

論文審査委員 松永 正義教授、恒川 邦夫名誉教授、安田 敏朗准教授

本論文は島田謹二『華麗島文学志』を、日本近代比較文学志および台湾文学史に位置付け、その意義を考察するものである。また分析の視角としては、島田謹二がフランスの比較文学研究をどのように受容し、どのように台湾文学研究に応用しようとしたのか、また当時の在台日本人のある意味での「土着化」の趨勢の中で、島田がそれをどのように受け取り、どのように働きかけようとしたのか、というふたつの視角の交点に、島田の仕事を位置付け、評価しようとするものである。

1 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 沈黙と誤解から理解へ

第一節 出発点—『華麗島文学志』はなぜ語られてこなかったのか

第二節 先行研究の検討—『華麗島文学志』はどう語られてきたのか

第三節 本研究の課題—『華麗島文学志』の理解に向けて

第四節 本論の構成

第一章 『華麗島文学志』読解の手がかりとして—「比較文学」とは何か はじめに

第一節 比較文学への入り口—『比較文学雑誌』の読み方

第二節 両大戦間におけるフランス『比較文学雑誌』の意義

第三節 1930年代における「比較文学」の受容.

小結

第二章 『華麗島文学志』の誕生

はじめに

第一節 出発点—「南島文学志」

第二節 『華麗島文学志』とは何か

第三節 「台湾文学」の消失と発見

第四節 「植民地文学」から「外地文学」へ

小結

第三章 『華麗島文学志』とその時代—郷土化・戦争・南進化

はじめに

第一節 『華麗島文学志』とその時代.

第二節 郷土化

第三節 戦争

第四節 南進化

小結

第四章 「外地文学論」形成の過程

はじめに

第一節 郷土主義文学・比較文学・外地文学

第二節 フランスの植民地文学研究

第三節 外地文学の課題

第四節 『華麗島文学志』のエグゾティスム.

第五節 植民地の真実とレアリスム

小結

第五章 『華麗島文学志』の受容—1940年代の台湾文壇と島田謹二

はじめに

第一節 台湾文壇の再編成

第二節 「台湾の文学的過現未」再読

第三節 「エグゾティスム」批判と「レアリスム」の提唱

第四節 「台湾文学」の定義と「文学史」観をめぐる議論

小結

第六章 太平洋戦争前夜の島田謹二—ナショナリズムと郷愁

はじめに

第一節 作家研究の確立

第二節 明治ナショナリズム研究の淵源

第三節 「郷愁」の行方

第四節 植民地の比較文学

小結

終章 二つの文学史における『華麗島文学志』の意義

第一節 日本近代比較文学史における『華麗島文学志』の意義

第二節 台湾文学史における『華麗島文学志』の意義

付録

(一) 文学研究年表 (1931~1945)

(二) 『華麗島文学志』在台日本人文学年表

(三) 島田謹二在台時期著作年表 (1929~1944)

参考文献

2 本論文の概要

本論文は島田謹二の『華麗島文学志』の研究、分析を通じて、島田の台湾文学観を比較文学との関わり、および当時の在台日本人の文学動向との関わりの方々の側面から検討し、さらにそこから島田の台湾文学観を探ろうとするものである。

第一章では、島田が影響を受けた第一次世界大戦後のフランスの比較文学を検討する。大戦の原因となった偏狭なナショナリズムに対する反省から、国境を越えた文学のありようを研究しようとする志向が比較文学の中には色濃く見られたが、島田はこうした理念や時代的意義には言及しない。ただ島田はそこに見られるヨーロッパ中心主義の限界を感じ、「日本派比較文学」の確立を提唱する。『華麗島文学志』はそうした島田の志向の実践としての日本文学研究の一環として始められたものである、と作者は論ずる。

第二章は、『華麗島文学志』の形成過程の分析から、同書がこれまで誤解されてきたような「台湾文学」研究ではなく、台湾における「日本文学」の研究である事を指摘する。また島田がこの研究を体系化してゆく過程のなかで、「外地文学」と「植民地文学」の概念を明確にし、前者を在台日本人による日本文学、後者を台湾人による台湾文学として、自覚的に区別するに至った事を指摘する。

第三章は、同書の成立時期である三〇年代の在台日本人社会の状況を分析し、この時期が在台日本人社会の土着化の始まった時期であり、そうした「台湾意識」にみあう台湾独自の文芸が模索され、島田の研究もそうした動向に沿い、またそうした動きを基礎づけようとするものであった事が述べられる。

第四章では、島田の「外地文学」の概念が分析される。島田はフランスの研究を参考に、「外地文学」とは宗主国人の文学であり、旅行者の手になる「エクゾティスム文学」への批判から生まれた「リアリズム」の文学である事を明らかにした。また仏領インドシナの外地文学を参考に、「広義の郷愁の文学・外地景観描写の文学（エクゾティスム）・民族生活解釈の文学（リアリズム）」を在台日本文学の課題とした。

第五章では、「台湾の文学的過現未」を中心に、島田の議論が台湾文壇に引き起こした反響を分析する。この時期には台湾人独自の文学活動は頓挫し、日本語による「外地文学」の中に台湾人が場を求めようになってき、島田の言う「外地文学」と「台湾文学」の境界が曖昧化する。しかし島田が当初の区分を堅持し、新しい事態に対応しなかった事が、今日につづく島田への誤解の原因となったと作者は指摘する。

第六章では、「南菜園の詩人靱山衣洲」を「ナショナリズム」と「郷愁」という視点から分析する。ここでは島田は昭和のナショナリズムの高揚期に、靱山の時代の明治ナショナリズムに向き合っていた事が指摘され、またそうした明治ナショナリズムへの関心は戦後の広瀬武夫、秋山真之の研究につながるが、戦後の研究では広瀬らが異文化や他者との交流の中で自他のナショナリズムを認識する経過を描いているのに対して、島田自身や靱山の台湾体験の中にはそうした意味での異文化、他者との交流が見られなかった事が指摘される。また戦時中島田が反国家主義、

反戦の立場を取った事が指摘され、同時にそうした姿勢を支えた島田の「比較文学の精神」が西洋と台湾、中国に対して一様に働かなかった事が指摘される。

3 本論文の成果と問題点

本論文は一方で比較文学に関わるフランス語の文献を精査し、他方台湾の社会状況、文学状況を当時の雑誌島の読み込みによって明らかにし、全体として島田謹二と『華麗島文学志』の位置を明らかにしたものである。

本論文の功績は第一に、フランスにおける比較文学研究、植民地文学研究の状況を明らかにし、そこから島田が何を受け取ったのか、またそこから島田がどのような文学観を形成していったのかを明らかにした点である。島田が日本の比較文学の重要な創始者のひとりであった事を考えれば、これはまた日本の比較文学形成しに対しても、大きく寄与するものと考えられる。

第二に、在台日本人社会の土着化の趨勢に注目し、旅行者のものとは異なる土着的な文学が追究されはじめていた事を明らかにし、そうした動きの中に島田の業績を位置づけた点である。こうした視点は今後在台日本人の文学活動を考える上で、重要な基礎を築いたものと評価できる。

第三に、島田の中で「外地文学」、「植民地文学」、「台湾文学」といった概念がはっきりと区別されていた事を指摘し、これまでの島田に関わる誤解を解いた点である。こうした結論は今後島田の『華麗島文学志』の位置を考える場合の定論となるべきものと思われる。

第四に、島田の『華麗島文学志』における業績を過不足なく位置づけ、本来島田が目指したものを明らかにしつつ、しかし同時に、島田のナショナリズムのありかたが、西欧に対する場合と異なり、台湾、中国には他者・異文化として向き合う事がなかったと指摘する点など、島田論を超えて、日本の文学、学問のありかたに関わる批判としても重要なものであり、それが具体的な論文の分析の中に説得的に示されている事も高く評価できる。

本論文は大変周到かつ過不足なく書かれており、完成度の高いものと評価できる。しいて言えば、第一次大戦後のヨーロッパの文芸思潮の重要なものとしてシュールレアリズムなどの方向があるが、島田の議論の中にこれが全く出てこないのはなぜか、リアリズムとエクゾティスムは本来的に対立するものではないのに、どのような機制でこれに対立的にとらえられるのか、島田の言うリアリズムは日本文学の中でのリアリズムとどのような関係にあるのか、島田に対する誤解を解いた上で、日本の比較文学に対してどのような見かたがありうるのか、といった疑問があるが、これらの疑問は本論文の問題点というよりは、今後の橋本氏への期待とすべきものだろう。

4 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2010年5月19日

受験者 橋本 恭子
最終試験委員 松永正義 恒川邦夫 安田敏朗

2010年4月21日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者橋本恭子氏の博士学位請求論文『『華麗島文学志』とその時代——比較文学者島田謹二の台湾体験——』に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、橋本恭子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を橋本恭子氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。